

4. 栽培しやすく付加価値の高いきのこ品種の開発をめざして

埼玉県農林総合研究センター 松岡 貴章

1 野生形状（大型子実体）ヒラタケの開発

ヒラタケは美味いきのこであるが、店頭での日持ちの悪さや競合するブナシメジの生産増加により市場を奪われ、生産量を減らしているのが現状である。

そこで、当センターでは、ブナシメジとの競合を回避し、新たな需要を喚起するため、欧米での栽培標準である野生形状（大型子実体）品種の育成・開発を行っている。

方法は当センターで保管するヒラタケ菌株80系統の選抜である。一次選抜では培地組成をスギおが：米ぬか：フスマ＝5：3：2とし、培養は温度21℃・湿度60％・二酸化炭素濃度3,000ppm以下の条件で21日間行い、収量・子実体の大きさの優秀な20種を選抜した。この際、子実体の発生が2回に分散し、1回目の収量が少なくなる系統が多数見られたが、生産現場での収穫は1回限りであることが多いため、発生を1回に集約し収量を増やすことが必要と考察した。そこで二次選抜では培地組成・培養条件を一次と等しくし、培地の更なる熟成を促すため培養日数を30日間に増し発生処理を行った。この結果、1回目の収穫に発生が集約され収量を増す系統も現れたが、逆に収量を減らす系統も見られた。以上から系統により最適な培養条件が異なることが推察された。また、生産現場の意見を取り入れるため、県内生産者3名に試験栽培を依頼し意見を求めている所である。

翌年度は一次及び二次選抜において優秀な5系統について、それぞれの最適な培養条件を模索し、最も優秀な系統1～2品種を選抜する予定である。

2 低温性ハタケシメジの開発

ハタケシメジは味や食感に優れる優秀なきのこであるが栽培が難しく、生産者から敬遠されるため生産量増加に結びついていないのが現状である。

そこで、当センターでは、ブナシメジなどと同じ低温環境で生産が可能な、既存施設における複合栽培を目指した品種の開発を行っている。

方法は当センターで保管するハタケシメジ70系統の選抜である。こちらは前年度までに一次選抜を終了させ10系統まで選抜した。今年度は、培地組成がスギおが：バーク堆肥：米ぬか：ビール粕＝5：5：3：4のものと、ここからバーク堆肥を除いたスギおが：米ぬか：ビール粕＝10：3：4の2種類の培地を用意し、培養温度21℃、湿度70％、二酸化炭素濃度3,000ppm以下の条件で51日間行い、発生処理の後、温度16℃、湿度100％、二酸化炭素濃度1,000ppm以下の条件で発生させ二次選抜を行っているところである。

翌年度は二次選抜において優秀な4系統について、複数の培地組成で最終選抜を行い、経営指標の最も優れた系統1～2品種を選抜する予定である。